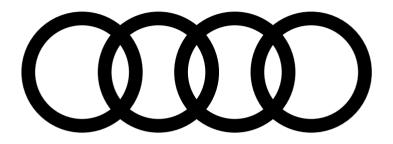
A7 Sportback

Audi A7 Sportback Media Info Progressive in design and technology





contents

P.02

Seven Up 成功作を超えるにはどうすればいいのか?

P.10

Creative Force

創造性を生み出す力

P.16

Overview 新型Audi A7 Sportback 概要



進化し続ける、デザインとダイナミクス

2011年、4ドアクーペスタイルを持った美しいグランツーリスモとして、

初代Audi A7 Sportbackは登場しました。アウディのプレミアムモデルに相応しい先進的な技術と、

美しいデザイン、そしてダイナミックな走行性能が高い次元で融合しており、 完全なニューモデルであったにもかかわらず、瞬く間に大きな成功を得ました。

7年を経て生まれ変わった新型は、「すでに完成形であった先代を超える」という困難なタスクを成し遂げています。新型A7 Sportbackには、デザインと技術の両面で、

まるでコンセプトカーが現実の路上に舞い降りたかのような先進性が詰まっています。

※すべての著作はAUDI AGおよびアウディジャパンに帰属します。写真はすべて欧州仕様です。また本誌における内容は2018年9月現在のものとなります。

Miran

成功作を超えるにはどうすればいいのか?

その答えは皆さんの目の前にあります。新型Audi A7 Sportbackのデザインは、 大評判になったコンセプトモデル「Audi prologue」そのままと言ってもいいほど、 きわめて先進的です。それを可能にするべく臨んだスタッフの気概や努力、 また技術面で新しく導入されたデバイスについて、

新型A7を実際に手がけたデザイナーの言葉を聞いてみましょう。

人々がはっと振り向く。

それは、滑らかに広がるボディ表面とシャープなエッ ジ、引き締まったラインを持つ新しいA7 Sportbackか らダイナミズムと先進性が溢れ出しているからです。

Marc Lichte

AUDI AGデザイン統括責任者

マーク リヒテ

4 人の男が、A7 Sportbackの周りをゆっくり歩いています。身振り手振りを交えて語り合い、指でラインをなぞり、思い出したように一瞬立ち止まったり、ひざまずいてディテールを指さしたり、楽しげに笑い合っています。彼ら、A7のデザイナーたちの表情には、自分たちの作品の出来栄えに対する自信があふれています。2017年9月のこの日、彼らは自分たちが手がけたA7 Sportbackの最終プロダクションモデルを初めて目にしました。その数週間後、世界中に発表される新型スポーツクーペが完成したのです。

注意深い眼差しと大きなジェスチャーが目立つデザイン部門のポス、マーク リヒテを見た人は誰でも、彼が活気に満ち溢れていることに気づくでしょう。リヒテはそのエネルギーを新しいA7に注いできました。「私たちは勇敢だったと思います」とチーフデザイナーはちょっと誇らしげに振り返ります。「私たちはこの新型A7で大きく前進したのです」 初代モデルの美しさを思えば、確かに大

胆な発言です。2011年にデビューした先代A7は数え切れないほどのデザイン賞を受賞し、多数の専門家からもフルサイズクラスの中で最も美しいモデルであると評価されています。つまり、その後継モデルが越えるべきハードルは非常に高かったのです。

スケッチとアイデアは世界中のアウディスタジオ、すなわちロサンゼルス、北京、ドイツのインゴルシュタットにあるデザインスタジオから集められ、最終的に5つのフルサイズクレイモデルが製作されました。しかしながら、すぐに根本から見直す必要があると判断されました。新型A7はよりスポーティで先進的、そしてもっと個性的でなければならなかったのです。

新型A7は際立っていなければなりません。「特にフロントの部分は」とリヒテは新型車の前にひざまずきながら語りました。シングルフレームグリルはより幅広く、そしてより低い位置に据えられ、コンセプトモデルのprologueを想起させるスポーティな外観を強調しています。リヒテは身振りで示しながら、厳選された面と

線がラジエーターグリルからどのようにボンネットのキャラクターラインや細長いヘッドライトに流れているかを説明してくれました。ヘッドライトはコンセプトモデルのように、さらに刺激的で挑戦的なまなざしに改められました。

新型ラグジュアリークーペは決然として見えるいっぽうで、先代モデルを忠実に継承しており、明確にA7であると見分けることができます。際立った特徴、たとえばスポイラーが格納されている逞しいリヤエンドや、上に跳ね上がるクォーターウィンドーなどは意識的に残され、さらに磨きをかけられています。それは横から見たプロポーションも同様です。ショルダーラインはより低く、BピラーとDピラーの間にだけ残され、ウエストラインを一層強調しています。これは、ホイールとホイールアーチをさらに剥き出しに見せる効果があるとリヒテは説明します。「これは私たちの優れた技術である"quattro"を視覚的に表現しています」このようにしてリヒテはA7に抗いがたい力強さを与えたのです。

私たちは勇敢でした。私たちはこの新型A7で大きく前進したのです。

01_ 流麗なフォルム

鋭く下降するルーフラインがシルエットを際立たせ、 リヤライトはまるで光のショーのように輝く。

02_ もっと低く

幅広いシングルフレームグリルは低く据え付けられ、スポーティなキャラクターを強調している。

03_ 美しき推進力

特徴的なリヤエンドはヨットの船首を彷彿とさせる。スポイラーは120km/hで上昇する。

04_ 多数のライト

リヤライトは13個の垂直セグメントで構成され、細長い帯状のライトが左右のテールライトを結んでいる。





<mark>01</mark>_ 人目をひく

A7は逞しく身構えている。細長いヘッドラン プは強い意志を秘めたまなざしに似ている。

02_ 上品かつダイナミック

フロント下部の3つのエアインテークが表情 をより精悍に引き締めている。

03_ さらに美しく

日中は12個のLEDセグメントが点灯し、夜間 はロービームモジュールが点灯。まるで瞳の ように見える。

私にとって、Audi 90 quattro IMSA GTOはアウディの真髄なのです。

ホイールが車のデザインを決めるという話は有名です。そして流れるようなルーフラインはクーペの最大の特徴です。新型A7は紛れもなく1970年代のアウディ初となる端正なクーペ、Audi 100 Coupe Sを思い起こさせます。その車をデザインしたのは、アウディとフォルスクスワーゲンで長年デザイン部長を務めたハルトムートヴァルクスですが、彼はリヒテの師匠でした。弟子が手がけた最初のアウディクーペが新型A7なのです。

エクステリアデザインの責任者、アンドレアス ミントも会話に加わりました。A7の筋肉質なホイールアーチを手がけた彼はモータースポーツの大ファンで、インゴルシュタットにやって来た当初は、立て続けに6、7回もアウディミュージアムに通ったといいます。「アウディのレーシングカーを隅から隅まで見たかっただけです」とその当時を振り返ります。目を輝かせながら、特に心を奪われたAudi 90 quattro IMSA GTOについて説明してくれました。「私にとって、それはアウディの真髄なのです」本物のレーシング

カーがラグジュアリークーペのお手本になったのでしょうか?少なくともミントはそう確信しています。IMSAレーシングカーの影響は、A7のフロントフェイスや際立ったウエストライン、逞しいホイールアーチ、そしてリヤのテールライトストリップに明らかに表現されています。

「そしてインテリアデザインでは」とドライバーシートに座っているインテリアデザイナーのウルリッヒ バイアーラインが口を挟みます。この新型クーペでは、レーシングカーと同じぐらいすべての操作系がドライバーを中心に考えられています。「シートポジションはまるで道路に直接つながっているかのようです」とバイアーラインは説明します。「車の性能を完全に引き出すために作られています。すべての操作系はそれを目的に設計されています」

そのために余分なものをできるだけ省いたダッシュボードは、 スリムなバーチャルコックピットや巧妙に組み込まれたヘッドアッ プディスプレイ、そしてセンターコンソールのブラックモニターと 同じくらい重要です。一般的なキーやスイッチ、ボタンなどは不要です。大型のタッチスクリーンで操作するまったく新しいインターフェイスを採用しています。「人間が主役なのです」

すべてがエレガントで、広々とした室内スペースを除けば、どれも大げさなものはありません。ミニマリズムがA7のデザインの基本哲学です。「A7は我々のデジタル志向を象徴しています」と、人さし指でモニターをタップしながらバイアーラインは続けます。モニターの表面からはアウディ自慢の"触感"がフィードバックを返してきます。大切なのは、タッチスクリーンのようなデジタルインストルメントは、カップホルダーといったアナログ部品よりもドライバーに近いということです。しかし、精巧に織り合わされたグラファイトグレーのトリムを介してデジタルとアナログは魅力的に組み合わされています。見た目が素晴らしいだけでなく、バイアーラインは右手がディスプレイ上で震える"触覚"も楽しく魅力的な経験だと言います。これこそがハイテクと職人技の融合とい

A7 Makers

Andreas Mindt

AUDI AG エクステリアデザイン責任者 アンドレアス ミント えるでしょう。

デザインのボスであるリヒテは、新型A7には視覚的な驚きも 備わっているといいます。「デイタイムランニングライトをとても気 に入っています!」 "瞳"付きの新しい"目"はA7のフロントフェイ スの大事な特徴です。「これによって、自信に満ちた表情豊かな フェイスを作り出すことができました」というリヒテの言葉をうれ しそうに聞いているのはシーザー ムンタダです。バルセロナ出身 のライティングデザイン責任者である彼は、"デジタルアイ"や 「イジタル"といった用語を多用します。

ムンタダ は左手で細長いA7のヘッドランプを指し示しました。 プは2つに分かれており、上部がデイタイムランニング ライトとロービーム、そして下部がコーナリングライトやターニン グライトといった機能を備えています。その上半分がムンタダの 自慢です。12個のLEDデイタイムランニングライトが並び、その 真ん中には瞳のように見えるロービームモジュールが据えられて います。日中は12個のLEDだけが点灯し、"瞳"の部分は暗いまま ですが、夜になると反対に12個のライトセグメントはオフとなり、 一方で"瞳"の部分(ロービーム)がいっそうクリアに光り輝くので す。A7に乗り込む時もちょっとした演出がドライバーを歓迎しま す。ドライバーがドアのロックを解除すると、ダイナミックターン インジケーターが左右に2度流れるように光り、続いてデイタイム ランニングライトが舞台のカーテンが開くように光ります。施錠し た時には、そのライトのショーは逆の順序で繰り広げられます。 ムンタダはそれを"動きのあるデザイン"と呼んでいます。A7

では速く鋭く、そしてA8では落ち着いてエレガントに動きます。

私たちのライトは動きのあるデザインです。 テンポとリズムは各モデルの 個性に合わせて設定されています。

Cesar Muntada

AUDI AGライティングデザイン責任者 シーザー ムンタダ



デジタル 01 フォーカス

ボタンとノブの代わりに2つの高解像度タッ 水平なラインと細長いダッシュ 新型A7では、30色もあるアンビ チディスプレイを装備している。ひとつはイン ボードがエレガントで簡潔な雰 エントライトで室内を演出でき フォテインメント用、もうひとつはエアコン 囲気を作り出している。セン る。ダッシュボードにある ディショナーとコンフォート機能用。指で操作 ターコンソールはドライバーに quattroバッジもイルミネー する際に触覚的なフィードバックを返す。

広々とした 02 雰囲気

向けられている。

精密なライティング 03 デザイン

ションが点く。

この新しい操作システムはいわばステージです。 主役はドライバーです。

Ulrich Beierlein

AUDI AGインテリアデザイン副青任者 ウルリッヒ バイアーライン

ライトの動くテンポとリズムは各モデルのキャラクターに合わせ て設定されています。

ムンタダが最も惹かれるのは"美しい動き"だといいます。それ はリヤエンドにも表れています。このラグジュアリークーペのテー ルライトは26個のLEDライトで精緻に構成されており、それは Ur-quattro(初代クワトロ)のオマージュに他なりません。リヤの フォグランプはレーシングカーのように中央に位置しています。

ムンタダのライティングデザインは単にスポーティで美しいだ けではなく、安全性にも十全の配慮がなされています。流れるイ ンジケーターライトはその好例です。「私たちの目は分割された光 の方が認識しやすいのです」と語るムンタダはこの機能を実現す るために、ライト開発の専門家たちと一緒に何か月も、時には1 日に3回も頭を突き合せたといいます。ムンタダは夜間、一般道 でA7を走らせてライトをテストし、その効果を確かめるために思 い出せないほどの時間を費やしました。彼を後押ししたのは情熱 です。「我々のライティングデザインはテクノロジーに生命を吹き 込みました」と詩的表現を好むムンタダは語ります。「私たちは車 の魂を舞台の上で披露するのです」

ムンタダのボスであるマーク リヒテは、それをより根本的に捉 えています。世間の人々がショーカーはすべて夢の産物で、その ままの形で生産されることはあり得ないと考えていることをリヒ テは知っています。しかし、新型A7がその見方は間違いである ことを証明しています。「prologueをさらに突き詰めたのがこの A7なのです」

minimin. 創造性を生み出す力 アウディで働く人々はデジタルな職人技をどう見ているのでしょうか? デザイナーとクレイモデラーが隣り合って、"視覚的な関係"を保ちながら働いています。 それはまた、デジタル技術と伝統的な職人技の理想的な関係でもあります。 視覚的な関係 A7のスケッチをクレイモデルと比較するデザイナーのアンド レアス コグリンとセバスチャーノ ルッソ(左、中央)。モニター 上でデジタルモデルを作成するフロリアン クローフル(右)。 Audi A7 Sportback Media Info 10 — 11

イ ンゴルシュタットにあるアウディの工場北側を通る人は、きっと新しいデザインセンターに目を奪われてしまうはずです。クラシックで落ち着いたガラスの外観に特徴的なアクセントが組み込まれたその建物は、地下1階、地上5階建てで、床面積は107m×71mに及びます。これはほぼサッカーフィールドに相当します。3年かけて建設されたこの施設で働く約600人の従業員は、以前は7か所に分かれて働いていましたが、現在はひとつ屋根の下で一緒に作業しています。デザイナーが大半を占めていますが、コンセプト開発や技術開発のインターフェイス部門"ストラック"に従事していた者も含まれています。

アンドレア シュテイブナーは新しい施設のプロジェクトリーダーです。2012年以降、コンセプト立案から建設まですべてを担当してきた彼女にとって、最大の課題は何だったのでしょうか?「私の同僚たちは創造性と美的センスの塊のような人たちです。

そんな人々のための施設を考えるのは大変な仕事でした」 たとえば、エントランスホールはテーマを入れ替えながらアートやデザインを展示するエリアであり、アウディの全従業員が利用しやすいように設計されています。オーク材や打ちっぱなしのコンクリート、綿など本物の素材だけが使われた食堂には小さな図書館があり、そこは大判の絵画が壁に飾られています。

明るく、輝くような雰囲気が、この広々とした開放的なデザインセンターの最大の特徴であり、それは建物の外にまで広がっています。「それは刺激的で創造力をかき立ててくれます」とシュテイブナーは断言します。彼女はインテリアデザインを専攻し、"開放的なオフィス空間設計"をテーマにした修士論文を完成させた後にアウディに加わりました。「この建物は理想的なデザイン開発プロセスのために設計されています」 LEDスクリーンと切削マシーンを備えたモデル製作スペースが隣り合って配置されており、

デザイナーたちは3Dモデルと見本となるクレイモデルを常に見比べることができます。また、スケッチに描かれたデザインを3Dモデル化するCAD担当者だけでなく、クレイモデラーとも直接顔を合わせながら作業できます。つまり、デジタルモデルと実物モデルの両方を比較できるのです。「働く人たちはいつも直接アイコンタクトできる、いわば視覚的な関係にあるのです」

オフィスや作業スペース、クレイモデルのスタジオを隔てるのはガラスの壁であり、簡単に目と目を合わせることができます。ミーティング用の"アイランド"は会議に最適であり、一方モデル製作スタジオはデザイナーやCAD担当者、クレイモデラーたちが集まって意見交換を行う理想的な場所となっています。この先数年にわたり、アウディは新モデルを多数市場に投入する計画であり、彼らの緊密な協力関係はさらに重要になっています。デザイナーたちは、より短期間で、より多くの完成度の高い新製品を求

Creative For

Marc Lichte

AUDI AG デザイン統括責任者 マーク リヒテ

最新のデジタル技術のおかげで、 画面の中の段階でもデザイン案を正確に 考察することができます。

それゆえ最初から細部まで煮詰めた クレイモデルを削り出すことができるのです。



01_ 透明性

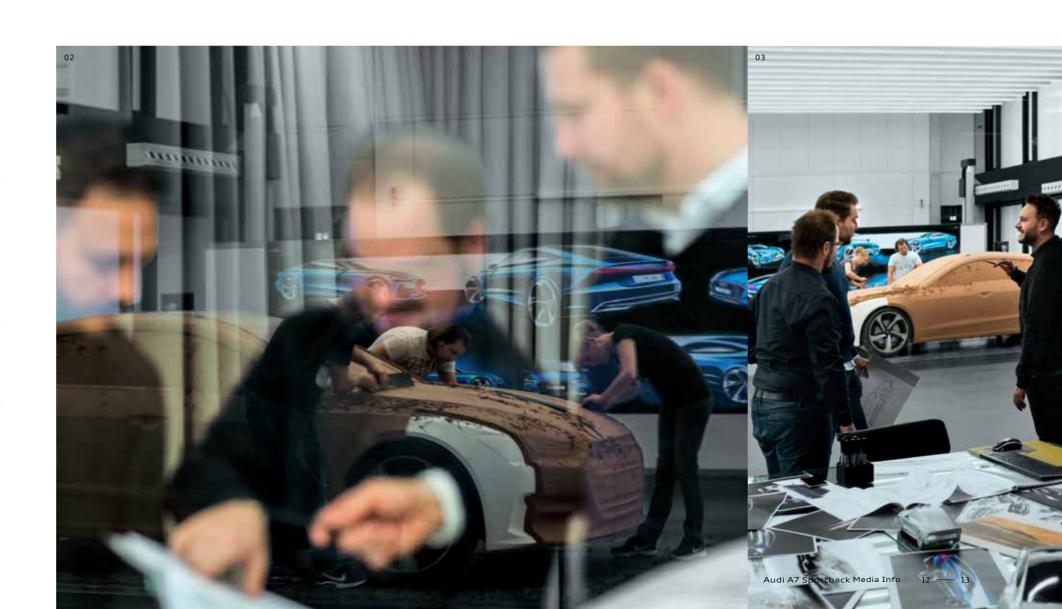
明るく輝くような雰囲気が、この開放的なデザインセンターの最大の特徴。施設はデザイン開発作業に最適な設計になっている。働くスタッフは常にアイコンタクトできる"視覚的な関係"にある。

02_ スタジオの様子

新型A7の先進的なデザイン言語について話し合う。

眺めるのではなく、 **03**_ 加わる

デザイナーたちのスケッチ用 テーブルはモデル製作スタジ オとつながっている。



トを生み出したアンドレア シュテイブナー。

新しいデザインセンターのオフィス空間コンセプ デザイナーとクレイモデラーが同じ空間で新型の フルサイズクーペ製作に取り掛かる。

められているからです。

2000年以降、アウディデザインの従業員数は2倍以上に増え、 現在は400人以上に上ります。ただし抱えるプロジェクトは5倍 以上となり、多様な技術的条件も克服しなければなりません。技 術的要求とデザインを両立させる作業は常により高度に困難に なっています。

だからこそ、デザインチームはデジタル技術と伝統的な職人技 を組み合わせた新たなC3プロセスを生み出しました。従来のモ デル製作と同じく、CADと巨大なLEDスクリーンに映る3D視覚化 モデルはその工程に欠かせない重要なものです。新しいデザイン センターはデジタルデザインのワークショップとしての機能も備え ています。各工程のどの段階でも、モデルを実物のように、様々 な場面や天候も考慮して見せることができます。どんよりと曇っ た2月の朝のロンドンでは、車はどのように見えるでしょうか? 視覚的効果はすべてコンピューターで正確に計算され、LEDスク リーンに映し出されます。「デジタルモデルの段階でも、デザイン 案を正確に評価できます。つまり、細部まで突き詰めたデザイン 案をクレイモデル製作に活かせるのです」とデザイン統括のマー ク リヒテは説明します。その結果、作業プロセスの精度は高まり、 より一貫した、そして柔軟なデザインを生み出すことができます。

キューブと呼ばれるユニークな"空間の中の空間"が、創造性を 高めることに役立っています。木材と金属で作られた24個の大 きな箱状の空間は、まるで産業用コンテナのようですが、日常の 作業の中で独立した島として機能します。 アンドレア シュテイブ ナーはデザイン作業においても重要な役目を果たしていると考え ています。「リラックスする場所としても使えます。デザイナーた ちが斬新なアイデアを生み出す空間にもなります」 新鮮なアイ デアは前向きに開発されることで、最後には魅力的な製品として 完成するのです。

Andrea Staebner

プロジェクトリーダー アンドレア シュテイブナー

創造性とセンスの塊のような同僚たちが 利用する施設を考えるのは、 やりがいのある仕事でした。



新型Audi A7 Sportback 概要

美しさとダイナミズムを融合した エクステリア

アウディの「Sportback」は、Coupé の美しさにSedan のプレステージとAvant の機能性を兼ね備えた独自のコンセプトです。その頂点に位置づけられるのが、プレミアム4 ドアクーペのAudi A7 Sportbackです。7年ぶりに生まれ変わり2世代目となった新型は、2014年に発表されたコンセプトカーの「Audi prologue (アウディ プロローグ)」が示したアウディの新しいデザイン言語を用い、張りのある大きな面とシャープなエッジ、シンプルで力強いラインなどによって、先代よりもさらに美しく、ダイナミックなスタイリングに仕上がっています。

フロント部分は、Audi A8よりも低く幅広いシングルフレームグリル、細いヘッドライト、大胆な縁取りがなされたエアインレット、低く伸びたボンネットなどによって、ひと目でグランツーリスモとしてのスポーティな性格が伝わります。ヘッドライトの上部モジュールには縦に12個並んだLEDライトがデイライトランニングライトおよびポジションライトを構成します。ヘッドライトはLEDライトが標準装備され、HDマトリクスLEDヘッドライトやアウディレーザーライト付きHDマトリクスLEDがオプション設定されます。

長く伸びたボンネット、長いホイールベース、短いオーバーハン グで構成されたA7 Sportbackのスポーティなキャラクターは、 4,970mmの全長、2,925mmのホイールベース、1,910mmの 全幅、それらに対して低めに設定された1,415mmの全高が物 語っています(Sラインパッケージ/スポーツサスペンション装着車 は4,975mm / 1,405mm)。ホイールハウスの上のアーチ状の膨らみは、アウディのモダンアイコンである「Audi quattro」から継承されたもので、後方に向かって滑らかに下降するルーフラインがサイドシルエットの大きな特徴となっています。車両重量は1,900kgです(オプションにより変動します)。

Overview

リヤエンドは、先代のA7 Sportbackと同様、ヨットのように両端が絞られています。ハッチゲートの後端はリップ状になっており、120km/h以上では内蔵されたスポイラーが自動的に伸長してリヤのダウンフォースを高めます。それぞれ13の縦型ライトセグメントで構成された両側のテールライトモジュールは、横に伸びるライトストリップが繋いでいます。ドアを開錠/施錠する際にはヘッドライトとリヤライトにより、光のアニメーションが展開されます。

クリーンでモダンなインテリア

インテリアは、先進性、スポーティネス、直感的な操作性、洗練性という4つの価値を重視してデザインされています。新型Audi A7 Sportbackの室内は、簡潔でクリーンな未来のラウンジのような雰囲気を醸し出しています。水平ラインと細いインストルメントパネルが広々とした印象を与え、ドライバーに向けて少し角度が付けられたセンターコンソールがグランツーリスモとしてのスポーティなキャラクターを強調しています。インテリアのすべてが新しい美意識を反映したものになっており、マルチカラーのアンビエントライトはインテリアの輪郭を繊細な間接光で際立たせます。

インストルメントパネルの10.1インチのアッパースクリーンにも、ドライバーに向けて少し角度が付けられています。ブラックパネルにグラファイトグレーアルミの飾りフレームを用いたこのディスプレイは、電源をオフにするとダッシュボードに完全に溶け込みます。ドアを開けるとすぐにパネルディスプレイに現れるインターフェイスアイコンは、インテリアデザインとマッチするよう簡潔なデザインになっています。

MMI タッチレスポンスによる 新しいユーザーインターフェイス

新型A7 Sportback のインテリアデザインを特徴付けているのが、デジタル時代にふさわしいユーザーインターフェイスを実現するMMI タッチレスポンスです。従来モデルのA7に採用されていたロータリープッシュボタンやスイッチ類に代わるもので、2つの大きな高解像度タッチディスプレイを採用しています。

上側の10.1インチアッパースクリーンは、インフォテインメントシステムを操作するためのもので、その下のセンターコンソールに、もうひとつ8.6インチローワースクリーンが設置され、ここで空調システムの操作や文字の入力を行うことができます。これにより、ボタンやスイッチを削減し、美しくクリーンなインテリアデザインを実現するとともに、より直感的な操作が可能になりました。どちらのスクリーンも、タッチパネルを操作すると触感と音によるフィードバックを返し、その感度と音量は調整可能です。操作は、スマートフォンのように直感的で、フラットなメニュー構

造により、様々な機能に素早くアクセスすることができます。

インフォテインメントと コネクティビティ

情報ネットワークと高度に結ばれた新型Audi A7 Sportback は、その点でも長距離ドライブに適したクルマといえます。LTE ネットワーク接続により車内での利便性が向上し、カスタマイズのオプションも広がっています。インフォテインメントとコネクティビティに関しては、新型Audi A8と同じシステムや機能が設定されています。最大7人分のユーザープロファイルをクルマに記憶させることができます。個々のドライバーについて400にも及ぶパラメーターを記憶し、各ドライバーに合わせてクルマの機能が自動的に設定されるようになっています。

新型Audi A7 Sportbackは、Audi connectによって音声による目的地のオンライン検索(クラウドベース)、ニュースや天気情報、最寄りのガソリンスタンドや駐車場検索、地図のオンライン更新(3年間無料)などが可能です。サービスへのデータ転送は、車両のAudi connect SIMにより行われます。

またAudi connect機能は、新しいmyAudiアプリに集約されています。このアプリを介してスマートフォンを新型Audi A7とネットワークで接続し、ナビゲーションシステムに目的地情報を送ったり、スマートフォンの予定表をMMIに転送したりできるようになりました。このアプリを使って、ドアのロック/ロック解除を行ったり、車両の状況をチェックすることもできます。

Overview

安全性、快適性を向上する ドライバーアシスタンスシステム

新型A7 Sportbackには、5つのレーダーセンサー、5つのカメラ、12の超音波センサー、1つのレーザースキャナーの計23個ものセンサーが搭載されています。セントラルドライバーアシスタンスコントローラー(zFAS)をはじめとする複数の車載コンピューターが、こうしたセンサーからのデータを元に車両周囲の環境モデルを常時算出し、各種ドライバーアシスタンスシステムにより様々な場面でドライバーをサポートします。

新たに追加された機能としては、見通しの悪い交差点でのフロントクロストラフィックアシストや、車両側面からの衝突にも備えるプレセンス360、従来のアダプティブクルーズコントロール(ACC)、トラフィックジャムアシスト、レーンキープアシストの3つの機能を統合したアダプティブドライビングアシスタント(ADA)などがあります。145°の視野と高解像度を持つレーザースキャナーの搭載により、多くのドライバーアシスタンスシステムで制御メカニズムが改善されており、より自然でスムーズな加減速やステアリングアシストを実現しました。

新開発シャシーによる優れた ハンドリングと 長距離ドライブの快適性

新型はスポーツ性と快適性の両面がいっそう改善されていま

す。新たにオプション設定された「ダイナミックオールホイールステアリング(AWS)」や「ダンピングコントロールサスペンション」により、応答性と乗り心地が大きく向上しており、ワインディングロードではダイナミックで俊敏なハンドリング性能を、長距離の高速走行では卓越した快適性を提供します。

フロントとリヤのサスペンションは、ほとんどが新設計されています。ステアリングの切れ角が大きくなるにつれてステアリングレシオが変化するプログレッシブステアリングが全モデルに設定され、ステアリングレシオは速度に応じて9.5:1から16.5:1まで可変制御されます。サスペンションは、スチール製スプリングを備えた標準的なサスペンション、もしくは車高が10mm低いスポーツサスペンションが設定され、さらに減衰力を調整できるアダプティブコントロールサスペンションとAWSがセットオプションとして選択できます。

AWS(ダイナミックオールホイールステアリング)により、後輪は最大5°まで角度が変わります。60km/h以下の低速では、後輪を前輪と反対の方向に操舵し、駐車時や市街地を走行している場合などにクルマの取り回し性を改善します。ステアリングを最大に切った場合の回転半径は0.5m小さくなります。一方で60km/h以上の速度で走行している場合には、後輪は前輪と同じ方向に操舵され(最大1.5°)、直進性や車線変更時の操縦安定性を向上させます。ブレーキには、最大400mm径のディスクとアルミ製固定キャリパーを用いたシステムを備えています。最大21インチの大径ホイールには、255/35タイヤが組み合わされます。

快適性と効率を改善する マイルドハイブリッドシステム

新型A7 Sportbackの3.0 TFSIエンジンモデルには、新開発 のマイルドハイブリッドシステム(MHEV)が搭載され、快適性と 効率を高めています。このシステムは48ボルトの主電源を採用し ており、リチウムイオンバッテリーとベルト駆動式のスターターオ ルタネーター(BAS)の働きで、ブレーキング時には最大12kWと いう高いエネルギー回生を可能にしています。また、Audi ドライ ブセレクトでefficiency modeを選び、55 ~ 160km/hで走行 中の場合、アクセルオフでエンジンをできるだけ停止させ、惰性 走行します。スターターオルタネーターを介しての再始動も非常 にスムーズです(最大トルクは60Nm)。BASにより、スタート/ ストップ機能の範囲も大幅に広くなり、22km/h以下で作動可能 になっています。フロントカメラと連携することで、先行車が動き 出すのを確認した場合は、まだ停止中であってもエンジンを再入 タートします。このMHEVテクノロジーにより、実際の走行条件 で100km走行あたり最大0.70の燃料消費が削減されます(欧州 仕様モデル測定値)。

新型のV6 3.00 TFSIエンジンは、直噴、Bサイクル、ツインスクロールターボ過給といった最新テクノロジーの採用により、最高出力250 kW (340PS) と最大トルク500 Nmを発生し、0-100 km/hをわずか5.3 秒で加速します。7速5トロニックトランスミッションと AWDクラッチを採用する最新のquattro 4輪駆動システムと組み合わせることにより、JC08 モードによる燃料

消費量は、12.3km/Qとなっています。

ボディの設計は、 Coupé、Sedan、Avantの特徴をひとつに

新型A7 Sportbackは、CoupéのデザインとSedanの居住性、Avantの多用途性を同時に提供し、ダイナミックでオールラウンドな資質を備えたモデルです。流麗なルーフラインを持つにもかかわらず、室内のスペースは拡大しています。先代モデルと比較すると、室内長は21mm拡大され、後席のヘッドルームも5mm広くなっています。またラゲッジスペースの幅も1,050mmと拡大されています。

スチールとアルミの複合構造を採用し、強度が必要な大型コンポーネントをアルミダイキャスト製に変更したボディは、ハンドリングと快適性の向上に大きく貢献しています。新型A7 Sportbackのボディは、捩じり剛性、エアロアコースティックス(空力音響)、エアロダイナミクスの面でも優れています。騒音・遮音対策も改善され、ウィンドノイズがほとんど聞こえない室内は非常に静かで快適です。

ダイナミックなエクステリアスタイルながら、ラゲッジスペース は通常時でも535ℓの大容量が確保されています。さらにリヤシートを折り畳めば、最大1,390ℓまで拡大することができます。形 状を工夫することで、ゴルフバッグを横にして2つ収納できるよう になりました。リヤハッチゲートを足の動きで自動的に開閉でき るセンサーがオプションで用意されています。

